令和８年度
男女共同参画社会づくり作文コンクール



男女が互いにその人権を尊重し、責任をともに分かち合い、性別に関わりなく個性と能力を十分に発揮できる「男女共同参画社会」の実現に向けた意識を高めるため、市内の中学生を対象に、男女共同参画に関する作文を募集しましたところ、数多くの作品が寄せられました。

ここに、入賞作品をご紹介します。

作品応募総数 237 点

（敬称略・五十音順）

【最優秀賞】

家族みんなでつくる暮らし	大沢野	中学校２年	熊谷　帆乃

【優秀賞】

私の「好き」は私が決める	八　尾	中学校２年	古賀　かのん
自分の手で作る未来	片山学園	中学校１年	高橋　和花
「女性なのに」は、誰が決めた？	片山学園	中学校３年	廣田　結希乃
私の体験から男女共同参画社会へ	八　尾	中学校２年	本多　永未理

【佳作】

性別にとらわれない社会へ	八　尾	中学校２年	井山　志帆
決めつけない社会へ	八　尾	中学校３年	大場　弓太朗
女性も輝ける社会へ	岩　瀬	中学校１年	小林　夏菜海
性別にとらわれない選択肢	岩　瀬	中学校２年	下山　蒼太
黒いランドセルが教えてくれたこと	大沢野	中学校２年	武田　千怜
自分の望む生き人生を送る	八　尾	中学校２年	田中　佳望
女性の活躍する未来になるために	八　尾	中学校２年	長岡　和仁
「性別」の一言の裏にある努力	岩　瀬	中学校２年	中村　勇真
フィルターの内側を見つめて	岩　瀬	中学校２年	針山　莉子
「自分」を貫ける社会へ	岩　瀬	中学校２年	好村　咲希

最 優 秀 賞

家族みんなでつくる暮らし

大沢野中学校２年　熊谷　帆乃

私の家は、父も母もフルタイムで働いている共働きの家庭だ。小さい頃から、朝はふたりで朝ごはん作りやごみ捨てを分担したり、夜は早く帰ってきた方が夜ごはんの準備をしたりする姿を見て育った。休日に父が手際よく洗濯物を干したり、食器を洗ったりするのも、私の家ではごく当たり前の日常の光景だ。

最近、母の会社で男性が育児休業を取る話やテレビのニュースで家事分担について話題になっているのを耳にする。世間ではまだ「家事は女性がするもの」というイメージが残っているところもあるらしい。しかし、私の家では昔から父も当たり前のように家事をこなしている。仕事で疲れているはずなのに、母と声を掛け合いながら協力して家事をする姿を見ていると、育児や家事は決して「母だけの仕事」ではなく、一緒に暮らす家族みんなで協力し合うものなのだと強く思った。お互いに助け合っているからこそ、私の家にはいつも笑顔があふれているのだと思う。

私には将来、一生懸命に打ちこみたい仕事がある。大人になったら自分の仕事に誇りをもち、夢中になって全力で頑張りたいと思っている。けれど、仕事ばかりに夢中になって家族のことを他の誰かに任せきりにしてしまう大人にはなりたくない。

仕事に全力で取り組み、社会に貢献しながらも、私の父のように家事や育児にも積極的に関わる。仕事か家庭のどちらか一方を諦めるのではなく、両方を大切に分かち合える大人になりたい。

将来、自分が大人になって家族をもったとき、今の私の家のような温かい家庭をつくれるように、まずは目の前の勉強や生活に全力で向き合っていきたい。

優 秀 賞（4点）

私の「好き」は私が決める

八尾中学校２年　古賀　かのん

私のランドセルは藍色でした。暗くて落ち着いた色を私はとても気に入ってました。しかし、学校では周りの人から「なんで黒なの？」と何度も聞かれることがありました。女の子が暗い色を持つのはおかしいと決めつけられたり、女の子なのに変だという目で見られたりしました。

その言葉を聞くたびに、私は、「なんで女子だからって暗い色はだめなの？」「なんで女子だからって明るい色じゃないとだめなの？」と疑問が増えていきました。

中学生になった今、あの時の小学生の頃の出来事を振り返るとそれこそが社会にある「男だから」「女子だから」という決めつけだったのだと気づきました。

最初は周りに色々と言われて嫌な気持ちになったこともあったけれど、私は自分が選んだ藍色のランドセルが大好きだったし、６年間大切に使い続けました。あの経験を経て、今の私は「男とか女とか関係なく、自分が好きなこと、したいことすればいいじゃん！」と堂々と考えるようになりました。周りの目を気にして自分の「好き」をあきらめなくて、本当に良かったと心から思っています。

これからも、ランドセルの色だけでなく、服や髪型、部活動や将来の夢など、すべての場面において「男だから」「女だから」で決めつけられても、「そんなの関係ないじゃん！」と胸を張って生きられるようにしていきたいです。そんな古い決めつけの言葉で、自分の「好き」をあきらめる必要は絶対にありません。誰もが性別にとらわれず、自分の好きなことに自信を持って「いいね」と言い合える、そんな自由で楽しい毎日を、私自身の手で切り拓いていきたいです。

自分の手で作る未来

片山学園中学校１年　高橋　和花

「その仕事は女の人には向いていないんじゃない？」もし自分が将来なりたい職業について、そんなことを言われたら、どう感じるだろう。私はきっと悲しいし、自分の目指す未来を否定されたような気持ちになると思う。

世の中には、まだ「男性向き」「女性向き」と考えられている仕事がある。例えば、大工や消防士は男性、保育士や看護師は女性というイメージを持っている人もいる。しかし、本当に性別によって向いている仕事が決まるのだろうか。体力が必要な仕事を目指す女性もいれば、人のお世話をすることが好きな男性もいる。大切なのは性別ではなく、その人が何をしたいのか、そのためにどのような努力をしてきたのかだと思う。

私自身も、周りの人の言動で「女だから」ということを感じることが多々ある。そのたびに、知らないうちに自分も「男だから」「女だから」と押し付けてしまっていないか、と考えてしまう。

男女共同参画とは、男性と女性をすべて同じにすることではない。それぞれの違いや個性を認めながら、性別によって可能性を決めつけられない社会を作ることだと私は思う。

そのためには、まず私たちが自分の考えや行動を見直す必要があると思う。「男なのに」や「女なのに」という言葉を簡単に使わないのはもちろん、自分と違う考え方や生き方を否定せずに受け入れたり、それをふまえた上で自分がどのような行動を取ればいいのかを考えること。それだけでも、社会を変える一歩になると思う。

誰かに言われたまま決める未来ではなく、自分自身でのぞみ、選んだ未来を歩けること。それはとっても大切なことだ。性別ではなく、一人ひとりの「やりたい」という気持ちが尊重される社会を、どうしたら作れるのかこれからも考えていきたい。

「女性なのに」は、誰が決めた？

片山学園中学校３年　廣田　結希乃

「女性なのに、工学部ですごいな。」

大学のキャンパスツアーで、今その大学に通っている本校の卒業生との座談会が行われた。先輩方は、中高生時代の勉強時間や、中学生の私たちがやるべきことなどを生き生きと話していた。その中で、自己紹介の際に「工学部です。」と話した女性の先輩がいた。私はそのとき、「女性なのに、工学部ですごいな。」と思った。

しかし、その日の帰り道、私はその言葉について考えた。

なぜ私は、「女性なのに」と思ったのだろうか。

工学を学ぶことは、本来、性別とは関係がない。興味があるから学ぶ。将来やりたいことがあるから挑戦する。ただそれだけのはずだ。それなのに私は、女性が工学を学ぶことをどこか特別なこととして見ていた。

そこで私は、固定観念は誰かに押しつけられたものではなく、自分自身の中に知らないうちに存在しているのだと気づいた。

そして、この固定観念は進路選択にも影響するのではないだろうか。「理系は男性が多い」「保育や看護は女性が多い」というイメージから、「自分はダメだ」と考え、興味があっても挑戦する前に選択肢を狭めてしまう人がいるかもしれない。周囲から性別を理由に進路を決められてしまうこともあるだろう。

しかし、進路はその後の人生にもつながる大切な選択である。だからこそ、性別によって可能性を狭められてはいけない。「女性だから」「男性だから」ではなく、「自分は何を学びたいのか」「何をしてみたいのか」で未来を選ぶ。そのためには一人ひとりが、自分の中にある「当たり前」を見直すことが必要だと考える。

あの日、先輩を見て「女性なのにすごいな」と思った自分。その気づきは、私自身の進路や、これからの社会について考えるきっかけになった。

「女性なのに」という言葉の中に、自分が知らないうちに抱いていた思い込みがあった。性別で未来を決めない。自分の意見で未来を選ぶ。その選択を誰もができる社会こそ、私が考える男女共同参画である。

私の体験から男女共同参画社会へ

八尾中学校２年　本多　永未理

私は元々、「男女共同参画社会」という言葉に反対でした。世間が言う「女の子らしく」「男の子らしく」という言葉に私自身が縛られていたからです。性別による役割は仕方のないことで、変える必要はないと思い込んでいました。しかし、ある時期の苦しい経験が私の考えを１８０度変えました。

小学４年生の時、私は「男の子らしくしたい」と願い、自分の身体に強い嫌悪感を抱くようになりました。小学５年生から中学１年の２学期にかけては、服装や髪型を中性的にし、一人称も時々「俺」を使っていました。本当の自分でいたかったのです。しかし、周囲の冷ややかな視線が突き刺さるたび、私は自分が大嫌いになりました。なぜ好きな格好を自由にできないのだろうと、一人終わりのない悩みに苦しんでいました。

今の私は服の系統も変わり、当時の強い葛藤は落ち着きました。しかし、あの苦しい日々は私の心に「他者への想像力」を植え付けてくれました。もし今、当時の私と同じように自分の性別や見た目で悩み、苦しんでいる人がいたらどれほど生きづらいでしょうか。さらに、これは女性だけの問題ではありません。逆に「男らしさ」を強要され、苦しんでいる男性もたくさんいるのではないかと気づいたのです。

現在は多様性の時代と言われますが、まだ古い思考で他人の個性を否定してしまう人がいるのが現状です。

男女共同参画社会とは、誰もが「らしく」の呪縛から解放され、個性を愛して好きなように生きていける社会のことです。そうなれば、ジェンダーに悩む人々も楽に生きていけると思います。かつて反対派だった私が変われたように、私の経験と言葉を広めることで、社会の意識もきっと変えていけると信じています。